

小竹貝塚の変遷

小竹貝塚は、日本海側最大級の縄文時代前期(約 6,000~5,000 年前)の貝塚で、呉羽丘陵北端(台地北西側)の山裾から平野にかけて立地します(標高約 3m)。

近年、縄文時代前期の埋葬人骨が 91 体出土し、全国的な注目を浴びました。現在までに確認された人骨は、最小個体数で 100 体にのぼります。

小竹貝塚は、縄文時代前期の日本海沿岸域における拠点集落の一つで、日本列島への人類の移住・拡散を考えるうえでも欠かせない重要な遺跡です。



縄文時代前期の景観と行動範囲

岡田一広氏は、コンピューターを駆使して縄文人が見たであろう眺望を復元しました。小竹貝塚からは、遺跡近くに迫っていた旧放生津瀉^{ほうじょうづがた} 一帯や富山湾を一望できたほか、遺跡背後の呉羽丘陵から境野新扇状地^{さかいのしん}も眺望できたと解析されました。また、平坦地で 1 時間に徒歩移動できる範囲を約 6km と仮定し、日常生活での活動範囲は旧放生津瀉東半部およびその沿岸、呉羽丘陵西麓、神通川河口左岸、富山湾(四方から海老江にかけての範囲)と解析されました。これは、小竹貝塚の貝層に、淡水域生息魚類(コイ・フナ等)、汽水域生息貝類(ヤマトシジミ等)、汽水域生息魚類(スズキ・クロダイ等)、海水域生息貝類(サザエ)、大形魚類・鯨類、呉羽丘陵に生息するほ乳類(イノシシ・ニホンジカ等)が含まれていた発掘調査成果と整合します〔岡田 2014〕。

弥生時代後期～終末期の小竹貝塚

小竹貝塚の南側では、弥生時代後期前半(約 2,000 年前)の溝や弥生時代終末期(約 1,750 年前)の竪穴住居跡の一部(東西 4.4m)などが確認され、後期前半の溝からは土器のほか、多様な木製品(盾・鍬未成品・板・棒など)が出土しました(図)。溝に堆積した当時の土壌にはイネ^{たいせき} 籾殻^{もみがら}や水田に生える雑草が含まれ、製作途中の鍬もあることから、後期前半の本遺跡で水田稲作が行われたことは明らかです。県内最古、かつ日本列島最北域の木盾も出土しました。

ここに注目！

もくだて 日本列島最北域の木盾とその意義

小竹貝塚からは、木目に沿って割れた長さ約7cm・厚さ約1cmでモミ製の木盾の細片が2つ出土しました(写真)。長軸(木目)と直交するよう3.5cm間隔の紐列ひもれつで補強し、割れを防ぐ工夫をした盾で、弥生時代を代表する構造の木盾(紐列式木盾)です。



県内で2遺跡からしか出土していない木盾

橋本達也氏は、弥生時代前期に九州で出現した紐列式木盾が、中期～終末期には九州・山陰・山陽・四国・近畿・東海・北陸(福井・石川)・中部高地(長野)にも分布し、特に終末期に多いと指摘しました〔橋本1999〕。近年は、富山県氷見市惣領浦之前遺跡そうりょううらのまえで後期後半(約1,900年前)の紐列式木盾17点が他の木製品(剣形・刀形・団扇形)と共に出土しました。

木盾は剣形・刀形など武器形木製品ぶき(儀礼の道具)と共に出土することが多く、これらは同じ儀礼に用いられたと考えられます。すなわち、木盾は武器形木製品などと一緒に用いられた儀礼の道具ぎらいでもあったのです。県内では、射水市下村加茂遺跡(前期)で剣形、高岡市江尻遺跡(終末期)で刀形が認められ、前者では鳥形木製品、後者では木甲もっこう(木製のよろい)も出土しています。

小竹貝塚の木盾は、木盾を用いる儀礼が福井・石川・富山に広く及んだことを示す日本列島最北域の資料であり、長野(北信地域)への木盾の波及を理解するうえでも大変重要な資料です。

小竹貝塚の南方約700mの台地北西側の縁辺部には弥生時代終末期～古墳時代前期の集落(山寺谷I遺跡・山寺谷II遺跡)があり、山寺谷II遺跡のほか小竹貝塚の南方約800mの呉羽三ツ塚古墳くれは、南方約1,500mの呉羽モグラ池遺跡といった標高約20～30mの台地上では弥生時代後期～古墳時代前期の墓が築かれました。台地上に墓を築いた有力者と関連のある集団の一部が、低湿地での水田稲作などを行うために小竹貝塚にも居を構えたと考えられます。

弥生文化が県内へと本格的に波及する後期に、水田稲作に伴う農耕儀礼も伝えられ、カミに奉納する舞などに武器形木製品や木盾などが用いられたと考えられます。小竹貝塚などをはじめとする上記の遺跡は、当時最先端の農業技術や文化をもった有力な集団が呉羽丘陵に進出してきたことを示しています。

主要参考文献

- 岡田一広 2014 「小竹貝塚の眺望と行動範囲—地理情報システム(GIS)解析から—」
『富山市の遺跡物語』第15号 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
- 富山市教育委員会 2013 『富山市小竹貝塚発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2014 『富山市内遺跡発掘調査概要XII—小竹貝塚—』
- 橋本達也 1999 「盾の系譜」『国家形成期の考古学』 大阪大学考古学研究室

編集・発行 富山市教育委員会埋蔵文化財センター